

本号の主な内容

新春特別号

新春座談会

「これからの10年を望む」



「小長井のオガタマノキ」(長崎県諫早市小長井町川内) 国指定天然記念物(昭和26年6月9日指定)

小長井町のJR長崎本線長里駅から3km、長里川をさかのぼること2km、多良岳東麓の畑縁に立っているのが「小長井のオガタマノキ」です。オガタマノキは、モクレン科の常緑樹で、和名のオガタマは招霊(オギタマ)が転訛したもので、神社などによく植栽され、縁起が良いものとされています。樹高20m、幹周り9.1mあり、樹齢は推定千年以上で、樹上にはエノキ、クスノキ、ムクノキ、オオイタビ、イヌビワ等の樹木が着生し、樹勢は極めて旺盛で、オガタマノキでは日本一の巨木とされています。かつて建築材として幹の途中から伐採されましたが、住宅一戸分の材木を殆どこの木で補えたと言います。この時、切り口から多数の太い幹を出す今のような特異な樹形に成長しましたが、その姿は雄大です。早春(2~3月)になると春を告げるように白い花を咲かせます。

謹賀新年

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 藤巻 司郎

年頭に当たって

造園建設業の明るい未来のために



新年明けましておめでとうございませう。

皆様におかれましては、新たな希望を胸に輝かしい新春をお迎えになられたことをお喜び申し上げます。

この一年が、造園建設業界にとって、経営環境の改善が進み、持続的な発展を見通すことのできる明るい年になりますことを、心から祈念する次第です。

経済の好循環の本格化により全国隅々まで景気回復の波が及んでいくことが、何よりも望まれていることは、昨年末の衆議院議員選挙結果からも明らかです。デフレ脱却に向けた「アベノミクス」で動き出した景気回復の芽が、是非とも大きく花開くことを期待しております。

景気対策による公共事業費の拡大やインフラの品質確保とその担い手の育成・確保に主眼を置いた「公共工事の品質確保の促進に関する法律」等のいわゆる「担い手3法」の改正などにより、私も業界を取巻く状況は大きく変化しつつあります。また二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの開催

に向けた話題や外国人観光客が増えるなど、造園業界全体が明るい未来を切り拓く新たな局面を迎えていると実感しております。

二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックは、長引く不況からの脱却、成熟化・少子高齢化社会などへの対応といった世界の先進都市が抱える諸問題に真っ先に直面している東京が、そして日本が、その解決策を具体的に提示する絶好の機会でもあります。

今こそ、造園業界は、これまで培ってきた力を結集し、世界に誇れる魅力ある安全で美しい緑豊かな環境づくりに、大きな役割を果たさなければなりません。

このような状況の変化を真摯に受け止め、造園建設業の活動領域の拡大と働く人がやりがいを感じ、誇りを持てる明るい未来の魅力ある環境づくりに、この一年、皆様とともに取り組んでいきたいと考えています。

本年も皆様のご指導・ご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

10年を望む

公園や街路樹をみると、残念だなぁと、がっかりすることもあります。これは、私が千葉県に住み、都心に近い方ではないこともあるからかもしれませんが、公園施設の多くがもう古くなってしまっていて、都心にあるきれいな公園と違って、見た目もボロボロで、手入れもしているのかなぁという感じです。

ですから、私は造園の施工管理を行う仕事に就いて、多くの人に気持ちよく使っていただけるような公園やそうした空間づくり、管理をしていけたらと思っています。



上野 澪 さん

上野澪 造園業について、はっきりとしたイメージはまだありません。授業で近くの2つの公園を調査し、改修提案をつくるという課題がありました。公園に行ってみると、利用者の数が全然違いました。アンケートやヒアリングを行いました。特に子どもたちの姿が見えない公園は、「遊んでいるとうるさいと言われる」など、近隣の方が公園利用者に対して理解がないというのがその主要な原

因のようでした。

公園そのものをつくったり、管理したりすることが造園の仕事ですが、その時に思ったのは、それだけではないということです。これは、先ほどのお話にあった一般の方が造園に対する意識がないということにも繋がっていることだと思います。

また、私も造園を学ぶまでは、さまざまな配慮、専門的な知識や技術があって、造園空間が作られていることを知りませんでした。ですから、一般の方々がわからないのは当然だと思います。でも、こんなにも身近にありながら、ほとんど知られていないのは、とっても残念です。もっと公園や造園を知っていただくことが、造園業の発展につながっていくのではないかと考えています。

松本 僕も大学に入るまで、造園について何も知らない状態でした。造園を学ぶ中で感じたことは、造園は管理が不可欠ということです。入学した頃に大学の農場ができましたが、その設計図を見るととても恰好のいいデザインでした。しかし、実際は管理費が削られて維持できなくなったなど、設計図と異なる空間になっていました。また、私が調査をしている公園も予算がなくなり、施設だけは何とか管理しているものの荒んだ状況になっているものがあります。

一方で、植栽にとっても力を入れている都心の公園もあり、道行く人が足を止めて眺める姿も見ます。造園に意識があるかどうかはわかりませんが、もし、そういう意識がなくても、「きれいだな」「いいな」と人々が感じる空間もあると思います。このように管理が造園にとって大事なことだと思います。

と話しましたが、10年後に計画した姿になるとして、当初の計画、設計が10年後まできちんと反映される制度になっていないので、これを変えられたらと思っています。発注時の担当者と管理の担当者が変わってしまうことが、ほとんどだと思いますし、施工者と管理者が違ってしまうことも、近年の入札制度では当たり前になっています。また、枯補償も1年だったり、施工後は管理者任せになるのが、現在の造園空間で、それで果たして良いのかと思っています。

設計図書に将来を文章などで示すこと自体、困難なことですが、示せたとしてもそれが将来に伝わっていくかは難しく、だいぶ上流の話になってしまいますが、変えていかなければならないことだと思います。

浅利 造園職の公務員として、市民がより利用しやすい環境づくりをしていきたいと考えています。緑の多い地域ほど、緑の存在は特に重要だとは思われていませんし、そのためか、緑に関するボランティアもまだ少ないようです。今後は、市民の方々が自発的に活用を図っていくことが望ましいと考えています。公園の楽しさをもっと広く発信し、より多くの方に利用していただくため、管理者と利用者の方々の仲介役になればと思っています。

森川 公園には防災機能をはじめ、多様な存在価値がありますが、まだまだ一般の方々に理解が得られていないですね。さて、すでに10年後という言葉が出てきていますが、今回のテーマである10年後の造園、ちょっと捉えづらければ、ご自身の10年後について、お聞かせください。

浅利 10年後は想像もつきませんが、その中間あたりの2020年に造園業がかかわっていく部分も多い東京でのオリンピックがあり、そういう区切りでみると考えやすいかなと思いました。

カヌーの会場が予定されている葛西臨海公園には、多くの生きものの生息空間になっている森があり、森の一部がなくなる計画になっていることから、反対の声が上がっています。生きものの保全は国際的な約束事にもなっていますが、まだまだ優先度は低い現状があります。

こうした社会の生きものの捉え方が、今後10年でどう変化していくかが造園にとって大きな問題で、造園からの提案も大事なのではないかと思っています。

那須 管理をどうしていくかが、これからの10年、将来に大きく影響してくると思います。設計の話で言えば、設計者がもっと口を出せるような方法が望ましいように思っています。

また、これまでの知見を一般化することも将来に向けて必要だと思っています。例えば、ビオトープなどの分野ではしゅん工後の管理について「ここはうまくいった」「ここはうまくいかなかった」といったデータが蓄積されつつあるので、ぜひ、活用したいです。

また、若い人が庭園に少ないというお話もありましたが、東京にいったら、東京タワーをみて浅草に行ってみたいな、「かた」のようなものが庭園にもあれば、来

て貰うきっかけになると思います。端的な例としては現地の説明版などもあるでしょうが、初心者にもわかりやすい、行ってみたいと思ひ、来てみたらなるほどと思うものを示せば、もっと広がりが出るのではないのでしょうか。



上野 温 さん

上野温 詳しくはよくわかりませんが、新しく公園や緑地をつくるより、ストックをどう生かすかが重要になってきていると先生などから聞いています。公園の多くが老朽化し、これらのリニューアルもあると思いますが、新しくつくるというものは少なく、大橋ジャンクションのようなトピック的な事業も時折あるものの屋上緑化も含め、新設は小規模のものになってくると思います。

ですから、これまで以上に質が重要で、那須さんがおっしゃったように、当初の意図を10年後、20年後に引き継いでいけるのか、オリンピックの後、施設をどうしていくのかなど、適切な財源、経済面も考えた維持管理について考えていかなければならないと思います。

丸 もっと造園業が発展していただいいですし、女性の活躍にも期待したいです。女性ならではの感性なども生かせるのではないかと思いますし、まだまだ、造園がかかわることができる場所がたくさんあると思います。屋上緑化や壁面緑化なども、さらに普及して、より良い環境にしていければと思います。

また、女性が携わることになると、家庭を持ち、子育てなどで仕事から離れる時期もあるかと思いますが、その後、復帰して会社に戻れるような環境ができていればいいと思います。

森川 仕事と家庭と育児の両立は、日造協でも課題になっていますし、一昨年の新春号では、造園界の女性による座談会で、そのお話も出てきており、経営者としても一生携われる仕事であって欲しいと思っています。

上野澪 携帯電話ができたり、写真がフィルムからデジタルになったりなどのお話もお聞きし、状況は常に変化していくものだと思いますが、里山管理なども含め、昔のやり方のいい部分は残すなど、受け継ぐもの、受け継いでいかなければならないものがあり、これらを効率的に伝えていける10年にしていけたらいいなと思っています。

松本 研究を通じて、狭山丘陵と多摩丘陵の雑木林の管理方法が異なることを知りました。近くにあるのに培われてきた伝統、管理技術が異なることは、地域文

“造園”は質や管理が重要 技術や文化を継承したい

森川 造園が携わっている場所は身近にありながら、一般の方にはなかなか知っていただけていないというお話が多く出ましたが、造園を学んだものとして、社会に出て、こんなことをしてみたいということをお聞きしたいと思います。松本さんいかがですか。

松本 将来は公務員を考えており、まだ、造園は人寄り、林業は自然寄りといった程度の認識の中で、どちらの職種にするか迷っています。その一方で、モニタリングや下草狩りなど、市民がかかわるといふ点にも興味があるので、公園のボランティアは何らかの形で続けたいと思っています。

上野澪 いま、造園会社で住宅周辺の植栽管理をしている部署で、現場写真の整理や報告書の作成などの事務的なお手伝いをしています。仕事の一端にかかわり、多くの人の目に触れる場所を管理するための専門的な知識や配慮などを学びたいなと思いました。私も早くそうした一人前の仕事ができるようになったらと思っています。

丸 私は造園施工会社に就職し、作業着を着て、足袋を履き、現場での作業に携わりたいと思っていますが、現場を見ると女性の姿はあまりなく、力仕事もあるので会社は現場に女性を求めているのかなとも感じています。

しかし、やる気は十分で、少しでも何か役に立てばと、造園技能士の2級も取りましたが、まだ、就職活動中です。

森川 日造協は全国に会員がいるので、そういう入職希望、採用の情報などの充実もこれからの課題と言えますね。

上野温 建設会社で土木と言いましたが、仕事の具体的なことはまだわかりません。漠然と将来を考え、家庭を持ったら、園芸的なことや地域のコミュニティなどにも参加したいと思っています。おっさんで、花の名前にやたら詳しくなったりしたら、人気者になれるかなあ〜と(笑)。

ものづくりも好きで、それがあずまやの研究につながっていたりもしますが、日曜大工的なこともやっていたら面白だろうなと思っています。

那須 一般的なものづくりと造園は違う

総支部長 四中近中北 東 北海道 国 畿 部 陸 豊 北	監事 森 正 小 大 北 加 渡 廣 矢 安 北 渡 米 森 森 持 廣 西 田 田 執 小 久 木 本 林 島 勢 部 澤 野 田 田 部 内 根 田 澤 岸 丸 澤 行 林 保 上	理事 加 小 奥 大 大 大 枝 梅 宇 磯 井 有 阿 望 正 卯 和 林 鬼 藤 勢 栗 本 八 大 場 島 吉 川 坪 部 内 路 部 月 本 之 田 林 頭 卷 一 充 勝 勝 啓 嘉 茂 真 啓 久 宗 勝 大 昇 新 輝 慎 司 朗 晴 郎 寛 彦 壽 七 種 澄 造 人 優 信 広 保 大 昇 也 幸 一 郎	業務執行理事 和 林 鬼 藤 田 林 頭 卷 新 輝 慎 司 也 幸 一 郎	会長 藤 卷 司 郎	副会長兼業務執行理事 鬼 頭 慎 一	一般社団法人日本造園建設業協会	賀 春

日造協 2015 年 新春座談会

これからの 10 年を望む

価値あるものをつくり、より価値あるものに育て、世の中に伝える

化と言ってもいいかもしれません。こうしたものを伝えていけるのは、造園なのではないかと思えます。

日常生活でマキや薪を使うことがなくなり、生産性のないものは廃れていく

ものですが、生物の多様性ととも、文化の多様性も残して欲しいと思っています。いかに有用であるかを検証、理解してもらい、将来につなげていけたらと思っています。

いますが、昔のまま残せばいいというものではありません。効率化なども含め、核心を見定め、翻訳してわかりやすく伝えていくことが、管理が主体となる時代の造園に不可欠ではないでしょうか。

浅利 生きものの力をもっと生かせたらと思います。子供に人気のポケモンや妖怪ウオッチなどはいろいろなキャラクターなどを集めて楽しむゲームですが、これは昆虫採集やバードウォッチング、釣りなどの楽しさの本質的に同じものだと思います。「レアなヤツを見つけたよ」「スゲー」みたいに、ゲーム感覚で誰でも楽しめるものなので、こんな風に楽しいんだという体験が学校などでできれば、そこから生きものや自然に興味を持つ人も増えると思います。

多様な生きものの存在は、人を楽しませる力があると思います。この力をり利用できるのは、造園職の特徴であり、これからの時代にさらに大きな武器になるものだと考えています。



丸 友望 さん

たいです。そして、自分の手で、公園や緑地をつくり、ここをつくったんだよって、自慢のできる職人さんになりたいと思っています。

上野 澤 カッコイイ大人になりたいとずっと思っており、働いている人ってカッコイイなあと思っていたので、私もバリバリ働いて、カッコイイ大人だと思っていきたいです。

その一方で、子どもを見てうらやましいなあ〜と思うところもあるので、遊び心も持ち続けるカッコイイ大人になりたいです。

松本 「日曜の生態学者」という言葉を聞いたことがあり、学校で生態学を学んでも、関係のある仕事に就くとは限りませんが、「日曜の生態学者」として、今後も木々のことをさらに学び、自然のことを知り、自分の世界を広げられる人になれたらと思いますし、その知見を人に知って貰えたらと思っています。

戻ってきたい人の心に残る 自慢できる 空間をつくりたい

たり、新宿出身の人は土がどこにもないものだったりしました。

戻りたい環境をつくりの話もありましたが、そういう空間をつくるのができたら嬉しく思います。また、現実として永遠に残る空間をつくることは難しいかもしれませんが、原風景として、人の心に残る空間づくりができればと思っています。

丸 造園会社に就職し、今以上に知識も技術も身に付けて、現場でバリバリ働き

造園空間の重要性と管理の必要性 理解得られるよう取り組む

森川 有難うございました。いくつかの課題や提案をいただきましたが、いずれも重要で、将来に希望を見出せるお話を聞かせていただき、嬉しく思っています。

最後に、冒頭からずっとお話をお聞きになっていた藤巻会長と高梨顧問、成家広報部会長から一言いただければと思います。

藤巻 皆さん異口同音に管理についてのお話をされており、おっしゃる通りだと思います。庭園の話題がありましたが、そうした庭園の保全・活用とともに、身近な緑もどんどん減ってきている現実もあるので、そうしたところにも目を向けていただければと思います。

また、管理の話ですが、ある庭園において競争入札で業者を変えたら、管理が不適切だと市民が声を上げ、技術の大切さが表面化しました。

ですから、審美眼の話も出しましたが、庭園をはじめ、公園も市民が声を上げれば、状況は変わります。造園空間の重要性と管理の必要性を市民の方々に理解していただくように、私たちも取り組んでいきますが、私たちの世代で叶わないかもしれません。

ぜひとも、皆さんの想いを今後も持ち続けていただき、そういう社会にしていっていただけたらと思っています。

高梨 一般の方が造園についての関心がない、造園を学ばれている人たちも業界のことがわからないということを造園業界、日造協として痛切に受け止め、改善しなければならぬと思いました。

そのほか、皆さんのお話からは文化力に関するものも多く出てきました。日造協では、「造園力」を掲げており、これは「創造力」「技術力」と「文化力」の3つの力で、みどり豊かな環境づくりを

志向していますが、もっと「文化力」の意味について、造園から発信していくことが必要なのではないかと思いました。

価値のあるものをつくり、より価値のあるものに育て、それを広く世の中に伝えていく中で、最後はそれぞれの人に、価値ある存在としての造園空間になっていかなければならないと思います。

また、女性にとって働きやすい環境の充実も欠かせませんし、男性にとっても魅力ある職場にしていかなければなりません。

さらに、生きものの側からも考えた造園空間、生物多様性と造園の距離をどう縮めていくかも大きな課題であり、設計意図のお話にあった制度、仕組みといった知的インフラは、造園にとって十分でない部分が多々あり、そうしたことへの取組み、それを担う人材も造園にとって不可欠だと思っています。

成家 新春号にふさわしいお話がいただけたことに感謝申し上げます。造園が知られていないことは、大いに反省するところで、ますます広報活動に力を入れていかなければならないと思いました。

また、本座談会にご尽力いただきました日本造園学会の皆様をはじめ、関係者の方々に改めて御礼申し上げます。

森川 まだまだ、話し足りないこともあろうかと思いますが、造園の将来に明るい希望を見ることができました。造園施工に携わると、いろいろな体験ができ、何よりも、自ら表現し、形にするというものづくりの達成感が味わえます。

今日の皆様の熱い想いを私たち一人一人が担っていかなければならないと思いました。造園業界の発展と関係各位のご健勝を祈念して閉会といたします。

長時間にわたり有難うございました。

市民が参加の仕組みづくりや造園をわかりやすく伝えたい

森川 造園は伝統技術も多くあり、その継承も大きな課題になっています。先ほども課題についてお話ししましたが、10年後はこうあって欲しいなという提案があればお聞かせください。



松本 薫 さん

松本 市民が参加しやすい制度、仕組みがあればいいと思います。雑木林のボランティアで、参加者の高齢化が危惧されています。定年退社された方が参加されることはありますが、まわりの団体にも僕のような世代はおらず、うらやましがられているような状況です(笑)。誘えば来てくれる友達はいませんが、「死体が遺棄される場所でしょ」「汚れるから」とか、マイナスの印象や作業にも魅力が感じられないようです。

しかし、雑木林の良さがわかると違ってくると思っています。もっと、多様な参加方法、いろいろな人が関われる仕組みができればいいと思っています。

上野 澤 休憩中に落ち葉を集めるだけではなく、焼き芋だとか、落ち葉焚きがあったので楽しかったのではないかとのお話があり、子どもの頃にそんなことをしていたなあと思出し、近頃は見かけないと思いました。

私たちが子どもの頃にあったそういう文化、コミュニティすなくなっています。そういうものを残していけたらと思えます。

丸 学校を出たばかりだと、当然、知識も技術ありませんが、先輩世代の方たちは、きっと忙しく、教える時間ももたないかと思っています。知識や技術を教えてもらえる機会があると嬉しいです。

森川 職人の技術は、見て盗め、教えるものじゃないという風潮もありました。また、丸さんが危惧されるように、先輩たちも自分のことで精一杯という近年の状況も確かにあるかもしれません。

しかし、若年者の育成も建設業の懸案事項になっており、日造協や支部などが主催する研修などを通じて、積極的に学ぶことができるのではないかと思います。

上野 温 何度か話題になっていますが、造園に興味、関心を持って貰うことが第一だと思います。興味のないものにはお金を使わないし、そういうものに投資する人もいません。イルミネーションなどは、多くの場所でやっているし、若い人が多く集まります。造園に関わっている場所も多くあるので、そうした機会が活用できないものかと思えます。

駅のポスターなどで、「紅葉を見に行こう」などといったものもありますが、魅力を伝えきれていないようにも思い、PRの難しさを感じます。また、倉敷や横浜などは、昔の風景と現在がうまく融合し、ともに西欧の要素が若い人たちが親しみやすい理由なのかもしれません。日本庭園の多くは大名庭園で、現在と切り離された歴史的遺構としか思われていないかもしれません。もう少し、親しみが持てる空間になると変わってくるのではないかと思います。

那須 土地にある人の歴史、自然的な歴史を正しく読み取る力、そして、それを見定める審美眼が造園には欠かせないと思います。いろいろな方がお話しされて

戻ってきたい人の心に残る 自慢できる 空間をつくりたい

森川 いろいろとお話をお聞きしてきましたが、ご自身の夢や希望についてお聞かせいただけませんか。

浅利 素敵なお話も時代が過ぎ、大人になってからも過ごしたい、一度離れても戻ってきたいと思えるまちづくりをしていきたいです。その手段のひとつとして、生きものの力を借りられたらと思っています。



那須 将 さん

那須 何故、神社のお供え物の研究を？との質問がありましたが、お供え物は多くがその土地の産物であり、それはその地の歴史、土地利用の知恵の集大成ではないかという観点から研究をしています。また、そもそも聖なる場所として皆が漠然と認めている神社の存在にも興味がありました。

こうした思いの根底にあるのは、日本という国、日本って何だろうという疑問で、政治や経済的な面ではなく、独特な価値観を緩やかに共有している日本というものがあり、その漠然としたものは、このまま放って置いてよいものではないような気がしているからです。

そして、そういうことを知ることでもっとこの国が好きになるのではないかと、もっと多くの人に知って貰えるのではないかと考えています。当面は、日本をもっと好きになれたらと思います。

上野 温 大学に入り、原風景を描くという自分にとっては衝撃的な授業がありました。原風景という言葉も知りませんでした。小さい頃のアルバムを引っ張り出して描きました。人それぞれ原風景は異なり、私は父が勤めている会社の社宅であった大きな団地のある風景でしたが、地方の郊外出身の人は、原っぱだっ